

音楽の散歩道 その10の1

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 — ナポレオン、ベートーヴェン、リスト

キラメキテラスヘルスケアホスピタル | 栗博志・高田昌実・田島紘己・上村章

加治木温泉病院 | 夏越祥次 | 東区・荒田支部 | 栗隆志

大海クリニック・大海宮崎クリニック | 大西浩之・海江田寛・牧野智礼

はじめに

先日、外来の机の上のカレンダーを眺めていて「2024年」という数字が気になった。何日かして思い至った。

数字は、2024ではなく、「1824」だったのである。

1824年は、古典派を代表する作曲家ベートーヴェンが人生最後の大作「交響曲第9番、ニ短調、合唱付」（以後「第9」と略す）を完成し、初演した年である。

その3年後の27年、彼は貧困の内に死亡する。本年は「第9」誕生から200年の記念すべき年である。

「第9」の事を考えていたら、今度は一通の手紙を思い出した。

まだあるかな？と、今ではゴミと化した海外からの音楽雑誌や、郵便物の山を漁っていたら、その手紙がでてきた。

32年前の1992年6月付であった。

イリノイ州の「Beethoven Society for Pianists」からであった。

鹿児島島の私になぜ？と、訝しく思いながら封を開くと、9月のピアノ音楽祭の案内状で「一緒に夢の時間を過ごそう」という内容だった（図1）。

プログラムは、7日間でPソナタ全32曲の演奏会、5日間でベートーヴェン／リスト編曲の交響曲全9曲の演奏会他、全20回の演奏会や講演会などで、国内外から70人のピアニストが集まるという（図2、図3）。

企画はもとより、更に驚いたのは、チケット代金である。メンバーは、20演奏会で32\$（当時は、多分1\$ = 100円以下だったろう）、つまり約3,200円である。1回が160円。



図1 演奏会の案内状, 1992

一般でも、夜のソナタ演奏会7\$, 昼の交響曲演奏会は、たったの3\$。全12回のコンサートを聴いても、計約6,400円である。

あまりの安さに驚くと共に、低料金で、これだけの大規模な音楽祭が維持できる、アメリカの音楽文化の底力を感じた（図4）。

主催者は、私に交響曲の演奏を聴かせたい、聴いてもらいたい、仲間になって音楽祭を楽

しんでもらいたい、と思ったのだろう。

30年～50年前の日本では、ベートーヴェンやショパン、モーツァルトらの事は知らないが、ロマン派の高名なピアニスト、例えばアルカンやタールベルグの音楽を、集中的に聴いている人は数人しかいなかった。

まして、ブゾーニヤリストに関しては、多分私一人だったろう。

(逆に演奏者、例えばフルトヴェグラー、マリア・カラス、カラヤンなどの初期LPを探す人、特にオリジナル版を探す人は多かつたし、限られたレーベルのLPを探すジャズ・ファンは特に多かつたが)

BEETHOVEN'S 32 PIANO SONATAS
All recitals will be at 8:00 p.m. in Shryock Auditorium
Fourteen internationally distinguished guest artists performing Beethoven's 32 piano sonatas in seven evening recitals in honor of Beethoven Society featured guest artist FERNANDO LAIBES

Friday, September 11, 1992 **OPENING NIGHT**
KENNETH DRAKE op 2 no 1, op 31 no 1
STEPHAN MÖLLER op 26, op 53

Saturday, September 12, 1992
KENNETH DRAKE op 22
STEPHAN MÖLLER op 26
ANA MARIA TRENCHI DE BOTTAZZI op 27 no 2, op 13

Monday, September 14, 1992
ARMENTA ADAMS-HUMMINGS op 2 no 2, op 27 no 1
MARY LOUISE BOEHM op 7, op 110

Tuesday, September 15, 1992
MICHAEL OELBAUM op 14 nos 1 & 2, op 90
LEONORA SUPPAN-GERBICH op 31 nos 2 & 3

Thursday, September 17, 1992
PHYLLIS LEHRER op 10 no 3
MYKOLA SUK op 10 no 2, op 77 Fantasy
LUIZ DE MOURA CASTRO op 49 no 2, op 10 no 1, op 81A

Friday, September 18, 1992
ROBERT ROUX op 49 no 1, op 79, op 57
SYLVIA KERSENBAUM op 78
STEPHAN MÖLLER op 106

Saturday, September 19, 1992 **GRAND FINALE**
NELITA TRUE op 2 no 3
SYLVIA KERSENBAUM op 54, op 109
PHYLLIS LEHRER op 101
ENA BRONSTEIN BARTON op 111

図2 演奏会のプログラム、32曲のピアノ・ソナタ

SEPTEMBER 1992 FESTIVAL
OF THE
BEETHOVEN SOCIETY FOR PIANISTS

TICKET INFORMATION

Festival contributors of \$32 become members of the "Beethoven 32 Club" and receive free passes for the entire Festival - 20 concerts in 9 days! All Festival program tickets are for general admission. Individual program ticket prices are as follows:

Evening Sonata Recitals (each)	Daytime Symphony Concerts (each)
\$7 public	\$3 public
\$5 students	\$2 students

The Afternoon Recital Series is free admission but open only to Beethoven 32 Club Members, Society members and patrons and visiting artists. Annual Society membership dues are \$10 and patron contributors are recognized in Society brochures for \$25, \$100, \$500 and \$1,000 gifts.

When writing for tickets, \$32 Festival contributors will receive a "Beethoven 32 Club" membership card which will be presented for all Festival concerts. When writing for individual program tickets, request either "Sonata" or "Symphony" tickets and the number of programs you wish to attend. Payment must be by check made payable to the Beethoven Society.

図4 低料金のチケット代

そこで今回は、「第9」200年を記念してベートーヴェン／リスト編曲、交響曲全曲の20世紀に於る録音史を書こうかと考えたが、欲を出して、ベートーヴェンの最後の20年間をも、ナポレオンの歴史と絡ませながら追加して、コンパクトに振り返りたいと思う。

BEETHOVEN'S 9 SYMPHONIES
All concerts will be at 1:00 p.m. in Shryock Auditorium

Monday, September 14, 1992
SYMPHONY NO. 1 in C Major, op 21
SYMPHONY NO. 2 in D Major, op 36

Tuesday, September 15, 1992
SYMPHONY NO. 3 in E flat Major "Eroica," op 55
and DANCE REPERTORY, Tard Intravasa, Director

Wednesday, September 16, 1992
SYMPHONY NO. 4 in B flat Major, op 60
SYMPHONY NO. 5 in C Minor, op 67

Thursday, September 17, 1992
SYMPHONY NO. 6 in F Major "Pastoral," op 68
SYMPHONY NO. 7 in A Major, op 92

Friday, September 18, 1992
SYMPHONY NO. 8 in F Major, op 93
SYMPHONY NO. 9 in D Minor "Choral," op 125

Eleven pianists performing each Symphony from the Liszt and Four-Hand Transcriptions featuring:

Dennis Alexander, Ena Bronstein Barton, Donald Beattie, Digby & Carol Bell, Mary Louise Boehm, Ana Maria Trenchi de Bottazzi, James Brackenridge, Arnette Burkhardt, Bridget & Luiz de Moura Castro, Keith Chambers, Sylvia Costa, Arlene Cravens, Jamie Cording, Wilfred Dwykins, Cedra Dew, Jan Hamilton Douglas, Betty Edmonds, Elaine Edwards, Philip Fensell, Susanah Gillan, Rachel Gilbey, Stephanie Gustave, Mark Hansen, Ritsko Hayashi, Leah Hempen, Joyce Henketh, Anita Hutton, Katherine Johnson, Melody Jones, Leana Kavelja-Crothers, Sylvia Kersenbaum, Kees Kooper, Ray Landers, Phyllis Lehrer, Ching Ming Lim, Li Lian Low, Judy Miller, Stephan Möller, Robert Mote, Marcia Murphy, Sook-Ryoon Park, Linda Poquette, Chad Reed, Jerome Reed, Paul Reed, Kenny Reese, Edwin Remain, Robert Rose, James Selway, Kavita Shandbag, Kara Shanks, Margaret Simmons, Janet Bass Smith, Rickey Snowman, Lyn Strothmann, Leonora Suppan-Gerbich, Marilyn Taggart, Sharon Tan, Francis Thompson, Nelita True, Katy Tucker, Ric Unkshie, Le-Khin Wae, Todd Westgate, Kathleen Wimberley, Christina Wu, Al-Jung Yang, Anne-Marie Yopp and Anna Yu.

図3 演奏会のプログラム、ピアノ版全9曲の交響曲

ベートーヴェン:1770-1827,享年56歳
ナポレオン :1769-1821,享年51歳

私は高校生の時に気付いていたが、皆様は気付いたでしょうか？2人の人生を並べてみると、2人がほぼ同じ時代を生きた事を。実際、ベートーヴェンは、ナポレオンに翻弄された。戦争に巻き込まれたりヒノフスキーと仲違いしたり、貴族達からの年金が支払われなかったりと、多大な影響を受けたのである。

貧困にあえぐ最晩年のベートーヴェンに援助の手を差し延べたのは、地元ウィーンではなく、産業革命による好景気のロンドンのモシュレスであり、ロンドンの彼の音楽仲間であった。

ベートーヴェンの死後、彼の顕彰のために、中心になって生誕地ボンに像を建立し、ボン市民にボンがベートーヴェン誕生の地と自覚させたのは、F. リストであった。

ベートーヴェンとリストに関しては、本誌60巻12号、2021、を参照。

なお本稿は2回に分けて発表する。

Part1 ナポレオンの時代

図5左は、華やかなりし頃のナポレオンを思い出させるダビット画の「戴冠式」。

この後に無数の死体の山が築かれる。

図5右は、作曲途中のベートーヴェン最高の自信作「Missa Solemnis D#、荘厳ミサ、二長調、1823」の作曲途中の楽譜を持つ、1819年のベートーヴェン。シュテラー画、1819。

仏革命が勃発したのは、1789年の事である。この革命により仏国王ルイ16世と、その妻マリー・アントワネットは処刑された。マリーは、神聖ローマ帝国皇帝フランツ1世とオーストリア女大公マリア・テレジアの娘である。オーストリアから見れば、娘が仏人民に義理の息子諸共、殺された事になる。



図5 左:ダビット画「戴冠式」 右:「荘厳ミサ」作曲中のベートーヴェン

革命勃発から15年が経過した。

1804年、総譜(交響曲等の楽譜)の表題ページの「ボナパルトに捧ぐ」の部分が掻き破られた(図6上)。そして出版時には「シンフォニア・エロイカ」の表題が付された「交響曲第3番、英雄」が完成した(図6下)。

仏革命後の共和制国家建設の指導者、自由の使徒と目されていたナポレオンが、皇帝に即位したからである。

ベートーヴェンも、やっとナポレオンの本性に気付いたのである。

共和制に名を借りた独裁政治の始まりである。

革命の波及を恐れる周囲の君主国の干渉、包囲網に対抗し、仏革命の理念の拡大、自由の名の下に、仏国民の心を驚掴みにし、闘争心に燃える民衆を強力な軍隊に仕立てあげ、

それをまんまと手中に収めたナポレオンは、ヨーロッパを我が物にせん、という野望を達成するために、周辺諸国への侵略戦争を開始したのである（仏革命以来、周辺諸国は度々、対仏同盟を締結）。



図6 上:エロイカの自筆総譜
下:出版されたエロイカの総譜

05年、ナポレオンは、イギリス本土に上陸・侵攻を企て、フランス・スペイン連合艦隊を派遣。

これに対し、ネルソン提督率いる英艦隊は、スペインのトラファルガー岬沖海戦で、よく知られる、2列縦列陣編成で連合軍の側面を突く「ネルソン・タッチ」で完勝した。

然し、銃弾に倒れたネルソンは戦死した。

開戦に先立ち「England expects that every man will do his duty」のネルソンの信号文はよく知られている。

<付録> 日本海海戦と東郷平八郎

トラファルガー海戦から丁度100年後の1905年、薩摩国加治屋町生まれで、英国に留学した東郷平八郎は、対馬沖海戦で、ロシア帝国海軍のバルチック艦隊に対し「T字戦法」で完勝した。

「天気晴朗ナレドモ浪高シ（秋山）」

開戦に先立ち東郷は、戦艦三笠艦上より、「皇国の興廢此の一戦にあり 各員一層奮励努力せよ」の檄を飛ばした。

海戦では完敗したが、陸戦での戦術には長けていたナポレオン（彼は元々、陸軍士官学校・砲兵科卒で、弾道計算などに才能を示した砲兵士官）は、砲兵攻撃、密集編成の歩兵、機動力を生かした騎兵を自在に展開させ、同年（05）末、当時のオーストリア領、アウステルリッツの3帝会戦（ナポレオン皇帝対オーストリア皇帝・ロシア皇帝連合軍）で連合軍に勝利した。

なお、この会戦の直前、ウィーンは2週間、ナポレオンに占拠された。

更に06年には、ドイツに進攻。イエナの戦いなどで、プロイセン軍に大勝した。ドイツは当時、数十の領邦国家から成り、神聖ローマ帝国がそれらを統括していたが、この年、フランツ2世の退位により、永年の歴史を誇る神聖ローマ帝国は消滅した。

09年には、ウィーンは再度ナポレオンに占領される。皇族達はウィーンを放棄。ベートーヴェン（1792年よりウィーンに定住）は、当てにしていた年金が貰えず困窮。老齢のハイドンは、病気が悪化して死去。

10年、調子に乗ったナポレオンは、ジョゼフィーヌと離婚し、ウィーンのシェーンブルン城から2度も追い出され、ナポレオンを

恐れていた、オーストリア皇女マリー・ルイーゼとの戦略結婚も勝ち取り、11年にはナポレオン2世も誕生。赤ん坊はローマ王となる。

12年、順風満帆、止まる所を知らないナポレオンの先に、大きな落とし穴が待ち構えていたのである。

この年、40万の大軍でロシア遠征、モスクワ進攻に踏み切ったのである。

圧勝かと思われたナポレオンがモスクワに到着した時、彼は眼前の光景に茫然とした。モスクワはもぬけの殻だったのである。

敗北を察したロシア軍は、モスクワに火を放ち、モスクワを捨てて退却したのだ。広大なロシアでは、逃げ隠れする地は無限に広がっている。

焦土作戦、兵法の基本である。

中国の古書「兵法三十六計」の最後、「三十六計、逃げるに如ず（走为上、孫子）」。

同様の策は、中世の日本の農民も行ってた。重税を課す領主に対抗して、農民が一同となり、農地を放棄して逃げ出す「逃散」である。

敵がいなければ、戦争は成立しない。極めて初歩的なナポレオンのミスである。

策士であるナポレオンは、大局を見極める能力が無かったのである。

信じられない事に、彼は戦争の基本である「兵站」の重要性すら認識していなかった。前線が延びる程に、大軍である程に、その重要性は増す。

広大なロシアでは、旧態依然とした現地調達など通用しない。

仏革命の高邁な理念を掲げながら、現地で略奪し、甘い汁を吸おうと考えていたら、司令官は元より人間失格である。

食糧を絶たれ、ロシア騎兵の奇襲に晒されたフランス軍に「冬将軍」が追い打ちをかけた。雪原、冷たい泥、寒風の中、命からがら仏に生還できたのは、わずか2万（諸説あり）

と言われる。残されたのは死体の山。

指令官のミスで、いたずらに多数の人命が失われる。実に虚しい。

ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニ主演の映画「ひまわり」での、同じような光景が目につく。夏は広大で、のどかなヒマワリ畑なのに（更に嘆かわしい事は、現在でも戦争が行われている事だ）。

13年には、スペインのヴィトリアでウェリントン侯爵率いるイギリス軍が、フランス軍に勝利する（図7）。



図7 「ウェリントンの勝利」の楽譜

更に同年のライプチヒの戦いで、ナポレオンは、ドイツ（プロイセン王国）、オーストリア帝国、ロシア帝国、スウェーデン連合軍と戦い、決定的に敗北した。

14年、パリは陥落、ナポレオンは退位させられ、エルバ島に追放された。

然し、野望を捨てきれないナポレオンは、15年、エルバ島を脱出し、皇帝復位を果たし、新憲法を發布するに至る。

だが、その後、現在のベルギーのブリュッ

セル郊外のワーテルローの戦いで、ウェリントン率いるイギリス・オランダ連合軍およびブリュッヘル率いるプロイセン軍との戦いになり、ナポレオンは大敗した。

前日からの豪雨でナポレオンが、開戦時間を4時間遅らせた事で、プロイセン軍の戦場到着が間に合った事、ぬかるみで騎兵と砲兵戦での砲車の機動性が発揮できなかった事などが敗因として挙げられる。

パリに逃げ帰ったナポレオンは退位を宣言。北米へ亡命（逃亡）を図るが、事前に察知し、海上封鎖していたイギリス艦船に投降するに至った。

今回は、南太平洋の孤島セントヘレナに幽閉され、孤独の内に死亡。51歳であった。

傲慢と雪と雨に負けた人生であった。

Part2 ベートーヴェン最後の20年 黄金期の凡作と貧困の中の傑作

さて、ナポレオンによる当時の政治的・社会的背景を理解していただいた上で、話をベートーヴェンに移そう。

ドイツのボンに生まれ、1792年（22歳）にオーストリア（ハプスブルク家）の首都ウィーンに移住し、死去するまで定住した。

1804年の「交響曲第3番、英雄」とナポレオンの関連については、既に述べた。

05年以降、12年までに彼は、P協奏曲4、5番、交響曲4、5、6、8番、ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲、フィデリオ……等作曲し、成果をあげ、ウィーンの名士だった。

ベートーヴェンにとって、作品は金のなる木であった。自分の曲は、いつでも数社（出版社）が買ってくれる、と豪語していた。

然しナポレオンの足音は次第に大きくなり、ベートーヴェンにも暗い影が追って来た。

05年のウィーンでのオペラ「レオノーレ」初演の5日前には、ナポレオンがウィーン

（シェーンブルン宮殿）を占領。音楽愛好家の皇族、貴族達はウィーンを離れ、公演は失敗。

09年のフランス軍のウィーン占領時（6月から3ヶ月間）には、パトロンのリヒノフスキー侯爵が、フランス軍将校をもてなそうと、ベートーヴェンにピアノ演奏を依頼したが、断固拒否した為、2人の間には深い溝が生じた。

更にパロン達からの年金も入らなくなった（09年3月、貴族達から4,000フロリンの年金が決定していた）。

何より、体のいい略奪、仏軍が課した1,000万グルデンの税が、市民生活を圧迫した。

ベートーヴェンは、ライプチヒの出版社に作曲料を送るよう請求している。

12年には、パトロンの一人キンスキー侯爵が落馬死し、その年金も停止した。

然し最悪の苦境に陥っていたベートーヴェンにも、やっと春が巡ってきた。

12年の冬将軍によるナポレオンのロシア遠征の敗退、13年のヴィトリアの戦いでの、ウェリントンの率いるイギリス軍の勝利である。

ベートーヴェンは、メトロノーム（1816）や自動演奏装置の発明者メルツェルの助言（？）に従い、機を失する事なく、ヴィトリアの戦いをテーマにした「ウェリントンの勝利あるいはヴィトリアの戦い」、別名「戦争交響曲」を書きあげたのである（図7）。

そして早くも年末に、この曲と「交響曲第7番」のセット公演を行った。

時流の戦勝ムードに乗り、公演は大成功で、熱狂の内に2公演が追加された。

ナポレオンの失墜を背景に、ナポレオンとは対照的に、ベートーヴェンの黄金時代（文字通り、金銭的な絶頂期）の到来である。

13年のライプチヒの戦いでのナポレオンの決定的敗北で各国は更に盛りあがった。

14年、ベートーヴェンは、人気に便乗。「レ

オノーレ」を改作・改題した「フィデリオ」は、16回も公演され、年金問題も解決。

14年9月、ウィーンでナポレオン後のヨーロッパの新秩序を議論する「ウィーン会議」が始まった。

然し、「会議は踊る、されど進まず」状態であり、各国の不満、対立を和らげたのが音楽家達であり、その中心人物がウィーンの名士、ベートーヴェンであった。

彼は、オーストリア皇帝、ロシア皇帝、プロイセン王に献呈する事となる、カンタータ「光栄ある瞬間」を短期間で作曲し、これと前記の「戦争交響曲」などが、各国君主や、6,000人の大観衆の前で演奏された。

ベートーヴェンは人生の頂点に立った。金銭的にも潤い、大満足であった。

だが、彼の栄光の時は、1813、14年の2年間であり、間もなく陰りが訪れる。

16年には難聴が進行し、17年には筆談帳を常用する事になる。

ウィーンの音楽界は、安定した生活の到来と共に、軽く明るい音楽、ロッシーニのオペラの時代になっていた。

だが失望のどん底のベートーヴェンに18年、救いの手が差し延べられた。



図8 ルドルフ・ゼルキンの「ハンマー・クラヴィア」

モシュレス、クレメンティらが最新のブロードウッド・ピアノを贈ってくれたのである。彼の創作意欲が再び呼び起こされた。

同年、早速「Pソナタ第29番、ハンマー・クラヴィア」が作曲された（図8）。以後、このピアノで第30、31、32番のソナタと「ディアベリ変奏曲」が作曲される。

19年には、難聴の進行の為、会話はほぼ不可能となり、「無給秘書」のシンドラが、身の回りの世話をするようになる。

21年には、経済状態は悪化の一途を辿り、みすぼらしい身なりのため、浮浪者に間違えられ、留置されたという逸話も残っている。



図9 「ピアノ・ソナタ第32番」
上:ポゴレリチ 下:ミケランジェリ

ところが、ベートーヴェンが、貧困と難聴に打ち勝ち、彼本来の音楽の黄金期を迎えるのは、これからなのである。年で言えば、22、23、24年の3年間である。

以下、順を追ってみるが、詳細は略す。

[22年]

彼の32曲のPソナタの最後を飾る「32番」。図9は、第10回ショパンコンクールで本選落ち。アルゲリッチが抗議、審査員を辞任・退場したポゴレリチ (P) 1982) の録音。

次は4年もの歳月をかけた自信の大作「荘厳ミサ」。この曲による収入を期待していたが、3,500グルデンの借金の一部しか返済できなかった(彼は後にこの曲と「第9」の出版交渉をショット社と行った。ベートーヴェンが呈示した値段は、「第9」が6,000フロリン、「ミサ曲」が10,000フロリンであった。彼の自信のほどが感じられる)。



図10 カルロ・マリア・ジュリーニの「荘厳ミサ」

図10は、カルロ・マリア・ジュリーニ (P) 1976) の演奏。彼のサインは珍しい。[23年]

彼の変奏曲の頂点となる「ディアベリのワルツの主題による33の変奏曲」を作曲。

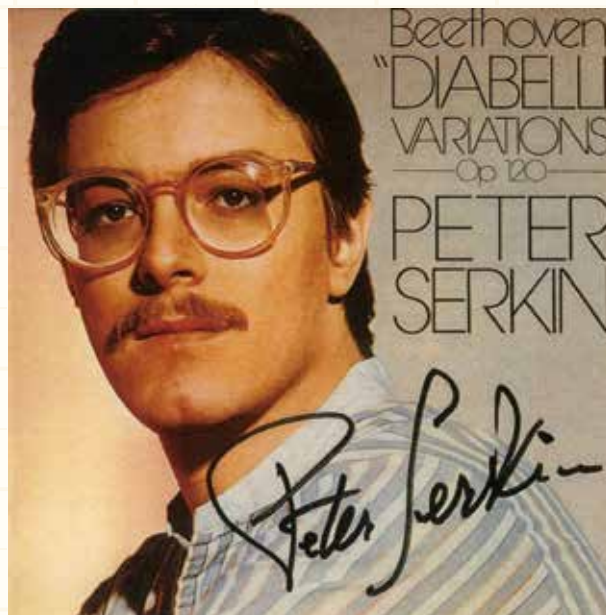


図11 ピーター・ゼルキン「ディアベリ変奏曲」



図12 「ディアベリ変奏曲」上:リヒテル 下:アラウ

図 11 は、ルドルフ・ゼルキンの息子、ピーター・ゼルキン 1979 年の録音。

図 12 上はリヒテル 1986 年、図 12 下は、1985 年のクラウディオ・アラウの録音。この 2 人の巨匠の録音の頃には、LP の製作は消滅した。残念である。

[24 年]

ベートーヴェンは 22 年、ロンドンのフィルハーモニー協会に、次に書く交響曲の買い取り価格を打診し、50 ポンドの回答を得てから承諾し、作曲を始める。

彼が頼れるのは、ロッシーニ全盛のウィーンではなく、ロンドンであった。

彼はシラーの讃歌「歡喜に寄す、1785」による合唱を最終楽章に持つ交響曲の作曲に全力を注ぎ「交響曲第 9 番、ニ短調、合唱付」を完成させた。

彼はロッシーニに熱中し、自分を忘れたウィーンに愛想を尽かし、この曲をプロイセン王に献呈し、ベルリン初演を検討していた。

今度は自分達が無視された事を知った音楽好きの貴族達は、ベートーヴェンにウィーン初演を請願。彼も已む無く承諾した。

会場は、かつて「レオノーレ」「運命」「田園」などが演奏された、「アン・デア・ウィーン劇場」ではなく、小さい「ケルントナートール劇場」であった。彼の威光も薄れ去った。

1824 年 5 月 7 日、「第 9」は初演された。200 年前である。

初演こそ大好評であったが、23 日の 2 回目は晴天の為、市民はピクニックなどに出かけ、会場に足を運ぶ事は無く、がらあき状態であった。収益は、わずか 920 グルデン。

失望した彼が、その後、公の場に姿を現す事は無かった。

「莊嚴ミサ」の初演はウィーンではなく、「第 9」の 1 ヶ月前の 4 月 7 日に、やっとロシアのペテルブルグで行われた。

25 年に「ウィーン楽友会名誉会員」に推挙されたが、何の足しにもならなかった。

26 年からは、上腹部に硬いしこりも認め黄疸も出現し全身状態も悪化。

27 年には、生活は増々困窮し、部屋代、生活費、治療費も払えなくなり、2 月にロンドンのモシュレスと指揮者スマート卿に援助依頼の手紙を書くに至った。

3 月中旬にロンドンのフィルハーモニー協会の 100 ポンドが届いた時、彼は涙を流して感謝したと言う。

だが、それも束の間、1827 年 3 月 26 日死去、56 歳であった。

ナポレオンの死から 6 年、ベートーヴェンの死もまた寂しいものであった。

葬儀には、2 万人が押し掛けたと言う。それまで全く無関心だった人達が……。

ベートーヴェン晩年 (22, 23, 24 年) の傑作群が、彼の窮状を救う金に成る事は無かった。そんな中、モシュレス (ロンドン・フィルハーモニー協会) から届いた 100 ポンドは、どんなにか彼を力づけた事だろう。

然し、次の事実も又、ここに書かなければなるまい。

彼は、ナポレオンの敗退した 13, 14 年の 2 年間に時流に乗り、私が聴いた事もない、多分凡庸な 2 曲、交響詩と考えられている「戦争交響曲」とカンタータ「光栄ある瞬間」で、銀行株券 8 枚、額にして 8,000 グルデンもの大金を溜め込んでいたのである。

彼はその内、銀行株券 7 枚は、決して手を付ける事は無かった。遺産として甥のカールに遺しておいたのである。

晩年の貧困生活、モシュレスに窮状を訴え、金銭的援助を依頼したのは、一体何だったのだろう。彼の心の中を想像はできても、真実を知る事はできない。

私が今、仮に彼の枕元に時空を超えて行く事ができても、その理由を彼に尋ねる事は、到底できないだろう。

私にできる事は、レコード棚にある沢山の

彼のLP, CDを引っ張り出して、苦悩の中から生みだされた彼の至高の音楽を味わい、そして楽しむ事である。そっと針を落とす。

歓喜の歌が、部屋の中を響き渡り、私の頭の中を駆け巡る（図13）。

（つづく）



図13 1951年のパイロイト復活音楽祭初日のフルトヴェングラーの「第9」

「第5番」 宗博

ナポレオンの ベートーヴェンの あなた方の そして私の…

運命は 全ての人々の人生の扉を叩き続ける

誰もその扉を鎖しづづけることはできない

1つの扉が開き 新しいドラマが始まる

やがて扉は閉じ そして又新しい扉が開く